特集 サークル長激白！ 本音インタビュー

「ウレシイ時ィ～、悲しい時ィ～」

絶叫調のタイトルはお笑いコンビからちょっぴり借用している。

人気はもうひとつのようだけど、マイナーな視線と健気なコンビ名が捨てがたい。

＜いつもここから＞

「初心忘るべからず」の思い、「頑張らなければ」の踏ん張り。

そのままサークル長の胸中と重なるのではないか。

長たる者の人知れぬ悩みやら、意外な余得やら。

「全部ぶちまけてください」と、しつこくインタビューした。　**学生記者取材班**

「そんなキツイこと聞かないでよ」ボヤキ節、落語のネタを生きる日々

落語研究会幹事長　上田直明さん（経済学部3年）

いきなりのボヤキ節。

「幹事長に選ばれたのは、消去法だと思う。3年は3人いるけれど、一人は自由奔放、もうひとりは……。だから、残るは自然と」。ババをひいた、と言わんばかりである。「面白そう」と入部したのに、同僚たちはポツポツと辞めていき、結局残ったのは3人だけだったそうな。

小所帯とはいえ、今年6人の新加入で総勢18人。

――どんな部員たちですか？

「全然、言うことを聞かない」「我が強い」「一緒にいると、いままでの人生が狂いだす」

……あぁ。

早く生まれるのも才能のうち、とばかりに、すべては先輩たちの独断と偏見で決まるのだそうである。昨年冬、学食「四季」にて、「幹事長に命ず」のご下命があった。

「なんとなくそんな気はしていたから。まあ、仕方ないか……と」

高座名も、先輩から賜る習わし。

△ふられ亭小夜奈良▽

――フラレテイサヨナラ。なんか、ぴったりよネ。

と、記者ふたり言いかけたところへ、部室のドアが開き、釣りの格好をした部員がふたり。こちらに向かってサオ（たたくとピコピコなる玩具）を投げ、「巻いて巻いて巻いて」……。さらには、ランドセルを背負い、黄色い帽子をかぶってコントをしたり、報道カメラマンに変装して、街頭インタビューのマネをしたり。もう大笑いである。

――幹事長、いつもこんなに愉快なんですか？

「お客さんが来ているからだよ。こういう時だけ、彼らははしゃぐ」

――ところで、女子部員は？

「それが、ふたりいるんだよ」

――かわいそうですね～、そのふたり。

「アヤノちゃんは、ものをはっき

り言うねえ」（記者ふたりの会話を耳にとめて、ちゃっかり名を呼ぶなんてユダンがならない）

——だってこんなに汚い部屋で、変な人ばかり。貴重な女子なんだから、大事にしないと逃げられるわよ。

そう言うと、

「いやあ、毒舌だ。まいった」

と頭をかく幹事長である。

こんな部員たちへ、「もっと社会に馴染んでほしい」と言う。

「でも、みんな寂しがりやなんだよな〜。いつも閉門の11時までいるし」。しんみりした口調で、「自分もとても寂しい。まとめるのも、渉外も、段取りも、すべて俺ひとり」とまたボヤキ節。

——話題を変えましょうね。幹事長でよかった、と思えるときは？

（しばし悩みながら）「OBとの絡みが多くて、タダ酒が飲めることかなぁ、ハハ」

中大落語会は、6月と12月に開かれる。

——お客さんは来るんですか？

「うわ〜失礼な。それを言うなよ。……チラシを配っても、無視ばかりで、もらってくれないんだよ。東京人に、もっと優しくなってもらいたい。でも、生協の駄菓子フェアで、10円のゼリーを丸ごと80本買い占めて、配ったら、もらってくれたよ」

——そのときに、チラシも添えて渡したんですね。

「いや、ゼリーだけ！」

かように謙虚な幹事長である。負担をしょいこみ、やる気がなさそうに見せながらも、裏では、真面目に部員たちの面倒をみる。「最低限のことだけ守れば、あとは何をしてもマァよい」と鷹揚なまなざしで。時には「フラレ」、時には「サヨナラ」され、身をもって落語のネタを生きる幸せな日々、と観た。

（白田＆猪瀬）

落語研究会・上田幹事長

個性派集団は「ユルイズム」『どうにかなるよ、の精神ですかね』

デザイン研究会会長　大澤高史さん（商学部3年）

写真、絵、映像、アクセサリー、洋服……自分の興味とやる気があれば、どんなことでもできそうなサークルである。そんな魅力的なサークルを率いるのが、大澤高史さんだ。メンバーはさぞかし個性派ぞろいだろう。

——サークル運営では、なにかと苦労があるんじゃありません？

「苦労は特にありませんね。苦労を苦労だとは思っていないのかもしれないけど……。どうにかなるよ、の精神ですかね」

お茶の水時代からの歴史を誇り、現在も、会員は約80人を数えるそうだ。まあ、メーリングリスト登録者数は、とのことではあるが。ことし、新入生は20人近く入会した。が、「だんだん減っていきます」と正直である。聞けば、活動は全て自由参加で強制行事はなく、締め付けが強くない。部員には特に期待せず、来たい人だけ来ればいいというのが、デザ研の「スタイル」。7月には図書館で写真や絵の展示会を行ったが、それも、「たまにはサークルらしいことを」という考えからだったのだとか。

——そんなにユルくて、大丈夫なんですか？

「誰かが展示やイベントをするとなったら、皆で見に行ったり、遊びに行ったりするんですよ。ちょっとずつ関わっているという感じです。何か規則を作った

デザイン研究会・大澤部長

りするよりも、ユルいままでいいと思いますね」

毎年、白門祭では中央ステージ一面に、横長の色彩鮮やかな絵が躍動する。論より証拠、あれがデザ研のオリジナル作品である。

絵が得意な人が看板の下書きをし、得意な人もそうでない人も「ちょっとずつ関わって」一緒に色をつけていくのだそうだ。毎年、図柄も工夫して、アートなメッセージを送り続けている。

――デザ研のいいところは？

「ユルいんだけれど、なんか皆あったかいんですよね。一番の居場所だなぁ」

力むことなく、でもいざとなれば……デザ研の「ユルイズム」はなかなかあなどれない。

会長の代が変わるごとに、がらっとカラーが変わるというが、大澤さんの代は？

「さあ、どうなんだろうナ」

ひとごとのような表情がおかしかった。

（植松＆池田）

「孤独？　だが寂しくない。友がいるから」
口ヒゲの威厳とやさしげな笑顔と

応援団長　久保田真（法学部４年）

「現状維持は下降線」。墨黒々とした張り紙が目に飛び込んでくる。精神に喝！　いかにも応援団である。

――いやでも目につきます。

「あれは伝統。言葉は一つひとつ考えて、気持ちを込めて書いています。僕も1年生のときに、この張り紙に惹かれたのが応援団に入ったきっかけなんです。張り紙を見て、応援部にはどんな人がいるのだろうかと興味を持ちました。先輩たちは、みんな姿勢がピシッとしていて、声高々。堂々たる感じに惹かれましたね」

――ところで、いま団員は何人ですか。

「6人です。今年の新入生は……1人でした。見学の時点では8人は来てくれたんですけどね、なかなか」

現状維持だって大変、とそんなふうに聞こえる。トゲのない「つるんとした時代」の悲哀であるか。

久保田団長は、おもむろに黒のサングラスをかけて登場した。この日、ＮＨＫの取材があって、カメラが回っていた。学生服姿の団員、それにチアリーディング部、ブラスコアー部、応援部の3団体がそろっての練習風景。「中央大学校歌ァ――」。団長の声、朗々と響きわたって、みごとな指揮ぶりが、6月末ＮＨＫ映像で流れた（「ニュースＰＬＵＳ」ページ参照）。

――サングラスはいつも？

「ええ、いや、威厳がなくちゃいけませんから。まあ、それで」

サングラスをとると、なんだかやさしそうな顔。いくぶん照れたようにして。うーんそれでか、黒メガネは……なんてことは言えませんが。

中大応援団は戦前から全国屈指の伝統を誇り、戦後の全学的な立て直しも一番早かった。一時は３００人もの団員がいたという。

――名門だから、厳しいんでしょう。いろいろしきたりが。

「上下関係は厳しいです。自分が1年の時は4年生の先輩の〝付き人〟でした。先輩のためのドアの開け閉め、部室掃除、電話番……」

そういえば、寮に電話した折は、とまどった。「団長は？」「押忍！」「いま、寮に？」「押忍！」と言うので、「ちょっと電話口」に頼んだら「押忍！　いま大学です」という具合だった。後輩は〝黙って、押忍！〟の世界みたい。そして「押忍！」は多義的なニュアンスに富んでいて、ただの「ハイ」と思ったら大間違いである。

――いつも「学生服」ですよね。抵抗はありませんか。

「ないですね。学生服でいることで注目されるじゃないですか。校内で〝この前は応援ありがとう〟なんて声をかけてもらうこともありますしね。学生服を脱ぐか脱がないかで心持ちも変わりますね」

6人の団員のなかで、4年生はただ一人。

――とすると、リーダーは人知れず孤独？

「4年生が自分しかいないので、同じ立場がいないという意味ではそうですね。弱い部分は後輩には見せられないし。しかし他の大学の応援部や、同じ寮の体育連盟の仲間たち

との交流がありますから、彼らには本当に助けられていますね。寮の仲間とは酒もよく飲みますよ。団長としては、後輩にやりがいを持たせてあげられるような団体を作りたいです」

1昨年秋、硬式野球部が「25年ぶり東都V」を果たした日、神宮球場でみかけた久保田さんはむしろヤセていた印象がある。ひげもなかった。いまは写真のような、恰幅のよさ。あごひげに口ひげ。

――太ったんじゃありませんか？

「前は65キロだったけど、いまは73キロ。やはり、団長は貫禄をつけなきゃいけませんからね。努力したんですよ」

ポストが人を育てる、一回りも二回りも体だって大きくなるわけである。

そんな久保田さんも卒団まであと半年。

「それまでに、〝自分の色〟を後輩たちに植え付けたい。基本的に後輩に怒ることはしたくないんです。自分が怒らなくても、後輩には自分の背中を見て育って欲しい。そして自分以上になって欲しいですね」

応援部の団長といえば、〝部の方針〟を変えるほどの権力を持つ。しかし「変えるところは変えて、つなぐところは、つなぐ」が彼の〝リーダー論〟だ。

応援団・久保田団長

律儀な、硬派の心意気。願わくば「V」の晴れ舞台で、見てみたい。中大スポーツ勢、駅伝も、野球も、水泳も乾坤一擲、頂点めざして頑張って欲しいものである。それが応援団再興の道でもある。

NHKに続いて、10月21日には日本テレビにも登場。芸能人が「おとこ道」に挑戦という趣向で、体験入団して「団旗あげ」に挑む芸能人の指導役を部員ともども立派にこなしてみせた。テレビにモテモテである。「この期に、ぜひとも部員を3人はふやしたい」

弾んだ表情で、団長は力をこめた。

（山崎＆滝沢＆大池＆池内）

「すべてが大変ですよ～」イバラの道ゆく探検部の男所帯

探検部部長　山田怜さん（経済学部3年）

「探検部は彼女ができたら終わりです」

ホネのある弁である。ま、しかし、これで人が集るんだろうか。

――今年の勧誘はどうでしたか？

「初めは気合の入った、墨でかいたポスターで呼びかけしていたんですけどね。熱い人を引き込もうとがんばったんですが、なかなか難しかった。で、いまは生ぬるい普通のポスターを貼っているんですが、反応は全く……。1年生の加入は1人でした」

――それで、全体の部員数は？

「5人なんですよ。全員男性」

探検部部長、山田怜さんはしばし天を仰いだ。「すべてが大変ですよ～」とつぶやきが漏れるわけである。山田さんが探検部に入るきっかけとなったのは『Hakumonちゅうおう』というから、うれしい。ローラースケートで八王子から九十九里浜までを移動した女性部員2人の話。じつは町田が書いた記事だった。

「大学のときにしかできない、いい意味でアホみたいなことをしたかったんです」

テニスとかありふれたサークルではなく、自然の中で活動がしたかったそうだ。

「でもじつは、中学はテニス部でしたけどね」

一言の注が、おかしい。

部長になったのは今年の1月。

――どのようにして、部長に決まったのですか？

「ほぼ、消去法みたいな感じですね。でも、去年ぐらいから自分がやるんだろうなと思っていました。最後には立候補なんですが、すぐに決

探検部・山田部長

まってしまいました」

――部長は大変？

「すべてが大変ですよ。みんな我が強く、普通のところにはなじめない、変わった人が多いのですよ。だからまず、まとめるのが大変で。自分も集団よりも個人で行動したい方なんで、大変だし。ミーティングに来てくれない部員もいる。山を登ってる時が一番非生産的で、『何で探検部に入ったんだろう』とか思うんですよね。でも、帰ってきて荷物をみんなで片付ける時にやりとげた満足感とか開放感があるんです。ある意味、麻薬みたいなもんですね」

――じゃあ、部長としてよかったなという感激は？

「今まで学年ごとに隔たりがあったんですね。けど最近それがなくなってきて、1年生も楽しくなってきたみたいで、『活動しましょう』って率いてくれていて。それがうれしいですね」

快活に、日焼けした顔がほころぶ。

1年生の夏に行った知床半島で早速、身の限界を感じた。ハイマツの森林を越えて岬まで歩くルートなのだが、道ではなく、名の通り高さ50―60センチで地を「這う松」を踏みしめて歩く。背中には30キロの荷物を背負いながら、「ヒグマとの遭遇の恐怖に怯えつつ、時速100メートルくらいで、9時間歩き続けましたよ」。しかも飲料可能な水は500ミリリットルほどしかなかった。湧き水を飲むと水に溶けているエキノコックスという寄生虫に感染し、肝臓がやられて死ぬ危険……。あまりの疲労感から放心していると、先輩からは怒声が飛んだ、という。まさにサバイバル体験だ。

「常に死の恐怖と隣り合わせ。自然はなめたら怖い」

骨身で知った実感を、今は他の部員を率いる部長の立場で大事に、手放さない。

――親は心配でしょうね？

「そうですね、親は反対してます（苦笑）。だから毎回、計画書を提出してるんです。ただ、大変っちゃ大変なんですけど、敷居が高い部活ではないんです。みんな探検初心者ですし」

探検部は30年以上の伝統を持っている。だからこそ、新入部員ヤーイ、女性部員もぜひ、と呼びかけは切実である。

その募集ポスターなのだが、連絡先の山田部長のメールアドレスが、ランダムな数字とアルファベットが並んで、やたらに長い。「他の部員に、このメンドくさいアドレスのせいで新入生が来ないんじゃないかって言われたんですよね」

カカカと笑う部長は、新加入のメールが届いた日には、小踊りするだろう。

そうそう、「彼女ができたら終わり」の冒頭の続き。

――なぜ、なんですか。

「部活と彼女と過ごす時間を混同して楽しい方に流されてしまいますからね。

夏休みも部の活動がほとんど。そこを理解してくれる人が理想の女性」

――で、理想の女性との出会いは？

「いやぁ……。目下のところフリー」

だそうである。

（町田＆大池）

おっとりと〝年の功〟「駒沢独走は悔しいですが」

吹奏楽部部長　串田昌也さん（文学部4年）

楽器ごとにパートリーダーがいて、仲間たちをとりまとめていくのだそうだ。部長の役割はまた一味ちがう。部長は、演奏活動の交通費や広告資金援助のため、学員の方たちとの会議に参加する。「そこでいろいろご指導をいただいています。他の部員が会えない人と接触できて、得るも

のは大きいです」

部員は１００人を超える。週５日の練習と部員も大変だが、それをまとめる部長はさぞかし大変だろう。

「そうでもないですね。活動日1日の日程を組み立てたり、来賓に挨拶するためにフロアに立ったり。演奏会実行委員会の各長や各パートリーダーが仕事を分担してやっているので」

1年の後期には〝学年部長〟となり、4年次には部長となることがその時点で〝内定〟するのだそうだ。

――そのときの不安は？

「推薦してもらったんですよ。浪人しているので、みんなより1つ上。年齢が上だから、やってみようかなという思いも少なからずありましたね」

吹奏楽部・串田部長

春夏秋冬、イベントは目白押しだ。この夏も、福島・宇都宮の演奏旅行（7月29日・30日）、8月にはコンクールの都内予選があった。この予選で6位入賞を果たし、9月都大会に進んだ。そこから選ばれる1―2校が10月の全国大会に出場が認められるのだ。03年度は全国大会金賞、04年度は全国大会銀賞。ところが昨年は都大会進出止まりだった。

――悔しかったでしょうね。

「悔しかったですね。ですが、納得はしました。例年にくらべて厳しい講評をいただきました」

金賞の頂点は駒沢大学。

――エッ、箱根駅伝の駒沢大学？足も音も、なのですか？

と思わず聞き返したところである。

「そうなんですよね。かなりレベルが高い。打倒・駒沢の自信？　さあ、どうでしょう」

そう語って迎えた今年9・24都大会決勝だが、結果は銅賞、全国大会出場校は金賞・駒沢だったそうである。「残念ながら」と、翌日もらった電話の声が沈んでいた。

1942年の創部。60年以上の歴史がある。OBの方々からは「タルんでるんじゃない」とお叱りを受けたり、「（この努力が）結果につながるといいよね」と激励されたり。部員が気の緩んだ時に声をかけるのも部長の仕事だ。演奏会やコンクールでは自らもチューバを演奏する。

――本格的な部活動だから、部長は留年覚悟、なんて聞いたのですが。

「留年？　最近の部長のなかではいませんよ。雑事は多いですけど、部長の仕事は負担ではありません」

――部長をやっていてよかったなあと思うことは？

「そうですね。自分が参加する最後の定期演奏会（11月）で、よかった！と思えるのが一番です」

おっとりとした口調が充実感と重なるようだった。

（池内）

「新入生はデジャヴュ。まるで孫みたい」軽妙トークで大所帯率いる〝顔〟

アナウンス研究会会長　木内宏太さん（経済学部3年）

伝統あるアナウンス研究会は、今年で創立38年目を迎えた。新入生は――近年にない大漁。どっと40人を迎え入れたそうだ。2、3年組を合わせた数とほぼ同じ。新歓になにか秘密がありそうだ。

――新歓の工夫のしどころは？

「新歓本部を設置したことですかね。シフトをきちんと組んで、ペデ下に出店を出して。必ず1人は詳しく説明できる人を置きました。あとは……花見に始まって、ボーリング大会とか、せっかく入ってくれた子たちを逃すまいと1カ月ごとにイベントを企画したことが大きいんじゃないかな」

第38代会長の木内さん。優しげな表情でお茶目な話が飛び出す。「なんか後輩たちがかわいくって仕方がないんです。孫みたいで（笑）」だなんて。

「自分が1、2年のときのデジャ

アナウンス研究会・木内会長

ヴュですよ」

と、そんなふうに話がウマい。

――大変さは？

「サークルの特徴としては、全体的にあまり厳しさがないかな。上下関係はない。いいこともあるけれど、話を聞かないとか、けじめをつけるのがとても大変ですね」

――そんなとき厳しく注意したりするんですか？

「自分は怒ることができないっていうか、怒れる身分じゃないっていったらいいのか。厳しくするのは周りの人に任せちゃってるんです。執行部の人たちはみんな有能で、その人たちをまとめなきゃいけないっていうプレッシャーも、やっぱりありますよね」

執行部員は全部で8人。昼休みや放課後の発声やアナウンスメントの基礎練習、番組発表会など精力的に活動しているのもアナ研の魅力だが、夏に備えるのも重要だ。

きびしい夏合宿の伝統がある。舌の回転滑らかに、口の開け方も鍛えるトレーニング法「うゐらふ売り」を合宿中に暗唱することができなければイベントには参加できない、という不文律もそのひとつだ。

――「うゐらふ売り」がまた意味の捉えにくい長いセリフですね。

「1年のときにできなかったのは僕だけだったんです。バーベキューのときもマンツーマンでついていてくれた先輩には本当に申し訳なくて。次の年に全部言えたのを見て、泣いて喜んでくれました（笑）。いい思い出です。

今の1年生にはそんなつらい思いをさせたくなくて、慣例をやめてしまおうかとも本気で考えたんですけどね」

さすが苦い経験もしているリーダー、後輩の気持ちも汲みとってくれる。

そもそもの話、と笑って打ち明ける。「僕はDJに興味があったんですよ」

――DJ、ですか？

「そうそう、ディスクジョッキー。音鑑とかに入るつもりだったんだから。1年生のときにもらったアナ研の新歓チラシに、DJを目指す君に云々、という文言があったんですよ。まさかラジオのパーソナリティーだなんて思いもよらなかった。それに、当時のアナ研はオタクっぽくてさ。でも周りのメンバーに感化されて活動が楽しくなり、自分で変えればいいか、と考えるようにもなったんです」

プラス思考で就くことになった会長ポスト。なぜか経済学部の会長が続いているらしい。それに不思議とアナ研のメンバーはB型が多いのだとか。

「僕らの代はみんな仲がいいんです。会長になるときの選挙公約の1つとして、仲のよいサークルを目指すことを挙げました」

――公約はうまくいっていますか？

「まあ、そうだと思いますよ。後輩たちが笑っているのを見ていると本当にうれしくて、やりがいを感じます。同時に、もっとリーダーシップを発揮できるといいんですけどね。貫禄が出るように、どっしりと構えて。とにかく、サークルの顔のようになりたい。サークル全体では、アクティブでないのが悩みなので、そんなイメージも変えていきたいですね」

40分ほどのインタビュー予定が気づいてみたら1時間半にも。明るい雰囲気と楽しいトークにノセられたせいである。

（竹下＆山崎）

気負いなく、みんなの意見を聞いて「後ろに回ってよく見えることもある」

サークル統一会議議長　小森亨さん（文学部4年）

締めくくりは、サークル統一会議議長である。登場したサークル長らが加盟する文化連盟、体育連盟など学友会の各連盟の代表者で構成され

る。そのトップだ。

主な内容は、サークルからの要望や、新しい部会の設立などに関しての審議、新歓祭、白門祭の運営など（学費値上げ問題への対応という重要事項もある）。そんな立場から見た、サークル活動の全体状況はどうなのだろう。

――今の学生は、サークル活動に熱中するというより、アルバイトやダブルスクールなどに力を入れる人が増えてきているように思いますが。

「入学者数が減ってきているので、それに伴ってサークル活動をしている学生の数は減ってきてはいますが、割合でみたら、それほど変わりはありませんよ。ただ、応援団などの伝統ある部会活動の人数が少数で、テニスサークルや、オールラウンドなどには、２００人、３００人のメンバーが集まっています。そういうところには、今の時代が反映されていると思いますね」

ゆっくりとした口調。威圧感を与えない。

――なぜ、サークル統一会議の議長をやろうと思ったんですか？

「文化連盟の委員長をやっていたんです。代々、文化連盟の委員長が、サークル統一会議の議長をやるという流れだったみたいで、『そういうものなんだ』という感じで」

――文化連盟の委員長をやろうと思ったのは？

「文化連盟の委員長は辞達学会が常連だったのですが、オリたために、所属する演劇研究会から出てみようかな、となったんですよ」

サークル統一会議・小森議長

自分のサークル活動をやりたいから、連盟のほうはやりたくないという人もいるだろうに、とイヤミを言ったら、「文化連盟の委員長としても1年間関わってきていますからね。その経験も生かしてサポートしていきたいとも思ったんです」と付け加えた。

「委員会で授業にいけなかったりすることもありますよ。でも、そこは割り切ってます。公欠にはなりませんしね」

バリバリ他をひっぱっていく「リーダーシップ型」と、意見をまとめあげていく「調整型」。どちらのタイプ？

「調整型、ですね。まとめるのは大変ですが、メンバーは気心の知れた人たちだし、その点では楽です。どんなことも、一人で考えないで皆で話を転がすようにしています。議題の事柄を認めるにしても認めないにしても、サークルのためになるアドバイスをしたいですね。いろんな方向から考えを見ようとして、結局ぐるぐる回っちゃったということもありますけど」

演劇研究会ではどうなのだろう。役者としての活躍は？

「役者は1、2年生がやります。3年生からは裏方ですね。1、2年生はまだ生きがいいですし、サークルに慣れてほしいということもありますから」

でも前に出てやりたいんじゃないんですか？

「前に出ていたらわからないことが、後ろにいくことで分かるということがあるんですよ。自分が裏方をして、前に出ている人が成功したら『よかったな』って思いますしね」

出しゃばらずに、全体を眺める。得がたい裏方魂というべきだろうか。

苦労話を聞くつもりだったのだが、こちらの挑発にも乗らず、終始和やかな雰囲気で、なにか議長のペースにはまったカンジ。

（猪瀬＆池内）

◇　◇

【学生記者取材班】

〈4年〉猪瀬智巳（商学部）▽白田彩乃（同）▽町田梨絵（同）

〈3年〉植松歩美（総合政策学部）▽大池夏未（同）▽滝沢孝祐（同）

〈2年〉池内真由（法学部）▽竹下奈穂（経済学部）▽山崎綾香（法学部）